

安部公房

Kobo Abe

われらの文学

安部公房

Kobo Abe

Kobo Abe

らの文学 7

編集 大江健三郎 / 江藤淳

講談社

われらの文学 7 安部公房

定価 四三〇円

昭和四一年二月一五日発行

著者 安部公房

発行者 野間省一

発行所 株式会社講談社 東京都文京区音羽町三ノ一九

電話 東京(九四二)一一一一(大代表) 振替東京三九三〇

印刷所 大日本印刷株式会社

製本所 加藤製本株式会社

©講談社 昭和四一年 落丁本・乱丁本はお取り替えいたしません。

目次

、	5	他人の顔
、	178	けものたちは故郷をめざす
、	325	飢餓同盟
、	449	赤い繭
、	452	デンドロカカリヤ

469 私の文学 || 安部公房

476 解説 || 大江健三郎

487 略年譜

装幀 || 細谷巖
卷頭写真撮影 || 野上透

安部公房

他人の顔

はるかな迷路のひだを通り抜けて、とうとうおまえがやって来た。「彼」から受け取った地図をたよりに、やっとこの隠れ家にたどりついた。たぶん、いくらか酔ったような足取りで、オルガンのペダルのような音をたてながら、階段を上りきった、とつぎの部屋。息をこらして、ノックを試してみたが、なぜか返事は返ってこなかった。かわりに一人の少女が、仔猫のように駆けよってきて、おまえのために、ドアを開けてくれるはず。伝言でもあるかと、声をかけてみるが、少女は答えず、薄笑いを残して逃げ去った。

おまえは、「彼」を求めて、のぞきこむ。しかし、「彼」はおろか、「彼」の影さえ、どこにも見当りはしないのだ、廃墟の臭いをただよわせている、死んだ部屋。表情を忘れた壁に見返されて、ぞっとする。後ろめたい思いで、引き返しかけたとき、テーブルの上の三冊

のノートと、それに添えられた一通の手紙が目にとまり、やっとおまえも、罨にかけられたことに気づくのだ。いくら苦々しい思いが、こみ上げてきても、その思わせぶりの誘惑には、やはりうちかてまい。ふるえる手つきで、封を切り、今おまえはこの手紙を読みはじめている……

怒りもあるだろうし、屈辱もあるだろう、ともすれば用箋からはじき飛ばされそうになる視線を、じっとこらえて、どうかそのまま読みつづけてもらいたい。この瞬間をおまえが、無事くぐり抜けて、もう一步こちらに歩み出してきてくれることを、ぼくがどんな思いで切望していることか。ぼくが「彼」に破れたのか、「彼」がぼくに破れたのか、ともかく仮面劇はこれで幕になったのだ。ぼくは「彼」を殺害し、犯人としてみずから名乗りをあげ、残さず一切を告白してしまおうと思っている。寛容からであろうと、その逆であろうと、とにかく読みつづけることにしてほしい。裁く権利がある者には、同時に、被告の陳述に耳傾ける義務もあるはずだ。

そうとも、こうして跪いているぼくを、そう簡単に見棄てたりしては、おまえまでがあらぬ共犯の嫌疑をかけられぬとも限らない。さあ、ゆっくり腰などおろして、くつろぐとしようよ。部屋の空気が悪ければ、すぐに窓を開けるがいい。必要ならば、台所には、急須もあれば

湯呑もある。おまえが腰を落着けしだい、ここは迷路の果の隠れ家から、たちまち法廷へと早替りしてくれるのだ。おまえが調書しらべをしているあいだ、ぼくは仮面劇の終りを、さらにいつそう確かなものにするために、幕のほころびに継ぎでも当てながら、何時まででも待ちつづけることにする。「彼」の追憶だけでも、ここ当分、まず退屈の気遣いなどはなさそうだから。

——それでは、ここで、しばらくぼくの時間に遡ることしよう。たぶん、おまえの今から三日前の、午前〇時。蜜をとかしたような雨まじりの風が、今夜もせがむようにして、窓を枠ごとゆさぶりつづけている。昼間は、汗ばむようでも、日が暮れると、つい火の気が恋しくなるほどだ。新聞によると、寒さ返りなのだそうだが、日が長くなったことは隠しようもなく、この雨があがれば、もうじき夏なのだろう。それを思うと気が気でない。ぼくの現状は、まさに蠟細工のようなもので、暑さに対してはからきし意気地がないのだ。照りつける太陽のことを思っただけでも、ぶつぶつ皮膚の表面が沸騰しはじめる。

そこでぼくは、夏がくるまえに、なんとかけりを付けてしまいたいものだと考えた。長期予報によれば、大陸の高気圧が張り出してきて、夏型の気象配置になるの

は、ここ三、四日のうちらしい。つまり、三日以内に、おまえを迎える準備をととのえ終り、そっくりこの手紙の冒頭につなげることが出来れば、申し分ないわけだ。しかし三日は、決してじゅうぶんな日数とは言いがたい。なにぶん、問題の調書は、ごらんのとおり、大判のノート三冊にぎっしり書き込まれた、一年間にわたる記録なのである。それを一日一冊の割合で、加筆し、削除し、訂正して、納得のいくものに仕上げねばならないとなると、これはなかなかの大仕事だ。気負い立ったぼくは、たっぶりニンニクをきかせた肉饅頭を夜食用に買いこんだりして、さっそく今日はいつもより二、三時間も早く戻ってきた。

だが、その結果は……いまましいことに……ただ時間の絶対的不足を、あらためて思い知らされただけのことだった。じつは、ひと通り読み返してみても、そのあまりにも言いわけがましい調子に、われながらうんざりしてしまつたのだ。ただでさえ滅入りがちなのに、この水びたしの夜ふけに、さらにしめつぽさが気になるというのだから、これはよくよくのことに違いない。幕切れが、かなり惨澹たるものであったことを、否定したりするつもりはないが、それでもぼくなり、つねに目覚めているのだという確信だけは持ちつづけてきた。その確信もなしに、アライの裏付けになってくれるものやら、逆に

有罪の証拠物件にされるものやらも分らない、こんなノートを書き、飽きもせず書きつづけてきたり出来るはずがあるまい。まったくの話、負け惜しみでもなんでもなく、ぼくは自分が追い込まれた迷路を、あくまでも論理上の受難だったのだと、いまだに固く信じ込んでいるのである。……しかし、予期に反して、ぼくのノートは、まるで閉じこめられた野良猫みたいに、いかにも哀れっぽい声で鳴きつづけていたのだ。いっそ、三日などという事にはこたわらずに、気がすむところまで、手を入れるべきなのだろうか。

いや、もう沢山だ。せっかく、一切を打ち明けてしまおうと、観念の臍をかためた矢先、噛み切れなかった肉の筋が、喉の途中に半分ひっかかったような気分は、これ以上もう真っ平である。悲鳴をあげているような部分は、いざれ末梢的なことなのだから、適宜、読みすぎないようにしてもらえば、それですむことだ。たとえば、おまえは、電気ドリルと、ゴキブリと、板ガラスをこする音が、大の苦手だが、だからといって、まさかそれを人生の重大事などとは言えない。電気ドリルは、歯医者機械からの連想だろうと、おおよその見当はつけられるが、あとの二つについては、一種の心理的蕁麻疹だろくらいしか言いようのない代物だ。蕁麻疹で命をとられたなどという話は、まだ聞いたこともない。

だが、もういい加減にして、きりをつけるでしょう。弁解についての、弁解を、いくら重ねてみたところで、どうにもなるものではない。そんなことより、大事なものは、現にいまおまえが、この手紙を読みつづけていくれることなのだ。ぼくの時間が、そのままそっくり、おまえの現在に重なり合っていてくれることなのだ。そして、引きつづき、ノートの方にも、そのまま読みすすんでくれること……ぼくがおまえの時間に追いつく、最後のページまで、投げ出すことなく読みすすんでくれること……

(いまおまえは、くつろいでくれているだろうか？ そうそう、煎茶は丈の低い緑色の罐の中だ。湯も、沸かしたてのやつを魔法瓶につめてあるから、そいつを使ってもらいたい。)

《黒いノート》

——ちなみに、ノートの順は、表紙の色で、黒、白、灰色となっている。色と内容とのあいだには、むろんなんの関係もない。ただ、区別しやすいようにと、行き当たりばったりを選んでみたまでである。

まず、この隠れ家のことからでも、始めるとしようか。どこから始めようと、いずれ大差はないのだ。ただ、あの日のことなら、切り出しやすい。半月ほどまえ、ぼくが一週間の予定で、関西に出張することになった日のことである。退院して以来、はじめてのまとまった旅行だったし、たぶんおまえにも印象深い日だったと思うのだ。旅行の名目は、大阪のある印刷インク工場の工程管理の視察ということだったが、むろん口実で、実はあの日以来、このS荘にこもって、計画の最後の仕上げにかかりきりになっていたのである。

その日の日記をくってみると、次のように書いてある。

△五月二十六日。雨。新聞広告をたよりに、S荘をたずねてみる。私の顔を見て、前の中庭で遊んでいた子供が泣きだした。しかし、地理的条件もいいし、部屋の配置もほぼ理想的なので、ここに決める。新しい材木と塗装の臭いがひどく刺戟的だ。隣はまだ空室のままらしい。なんとか、疑われずに、隣の部屋も借りられるといいのだが……

だがぼくは、S荘で、べつに変名もつかわなければ、

身分を偽ろうともしなかった。無分別にみえるかもしれないが、自分なりの計算もあったのである。ぼくの顔は、いまさら小手先のごまかしくらいでは、どうなるものでもない。現に、玄関先で遊んでいた、そろそろ小学生だと思われる何処かの娘が、ぼくをひと目みるなり、夢のつづきでも見ているように泣きじゃくりはじめたほどだった。もっとも、肝心の管理人は、客商売のせいもあってか、馬鹿に愛想がよかったが……

いや、愛想がいいのは、なにも管理人ばかりとは限らない。残念なことには、ぼくと出会ったほとんどもすべて人間が、愛想だけは惜し気もなく支払ってくれた。こちらが、ある地点から深入りしようとしなにかぎり、誰もがすこぶる気前のいい払いっぷりをみせてくれた。無理もない。ぼくの顔をまともに見まいとすれば、せめて愛想くらいはよくせずついにいられまい。おかげでぼくも、無用の穿鑿は避けられるというものだ。愛想の壁でさえざられて、ぼくはいつも、完全に孤独だった。

S荘は、新築して間もないせいにか、十八ばかりある部屋の、半数ちかくがまだ空室のままだった。管理人は、頼みもしないのに、万事飲み顔で、二階のいちばん奥まった、非常階段の隣の部屋を選んでくれた。つまり、そんなふうだったのである。もっとも、その部屋は、たしかにわざわざ選んでくれただけの値打ちはあった。浴

室はむろんのこと、上等ではないが、机に二脚の椅子が備えつけになっていたし、それに、ほかの部屋にはない、テラス風の出窓までがついていた。おまけに、非常階段の下が、四、五台分の駐車場になっていて、そこから直接、横の路地に出入れるようになっていて、むろん、それ相応に値も張っていた。しかし、ある程度の投資は、はじめから覚悟の上のことだったので、すぐにその場で、三ヶ月分の敷金しききんを払込んだ。ついでに、近くのふとん屋から、夜具を一式、とどけさせることにする。管理人は、ますますうれしさを隠しきれないともいうように、通風の加減や、日当りの具合などについて、際限げんもなく喋りつづけた。そのうち、話題がつきようものなら、身の上話でもはじめかねない勢いだった。が、運よく、差出しかけた部屋の鍵を、私の手にとどくまえにはなしてしまったので、鍵は鋭い音をたてて床にころがった。管理人は、やり場のない表情で、あわててガスの元栓の封印を引きちぎると、そそくさと退場してしまつてくれた。やれやれである……こんなふうに、嘘の上塗りがいとも剥げやすいものだったら、どんなにか気楽なことだろうに……

すでに、顔のまえにひろげた手の指が、数えられない

ほどの暗さになっていた。まだ、人間を住ませた経験のない、その部屋は、いかにもよそよそしくて無愛想だ。しかし、愛想のいい人間などよりは、このほうがまだずっとましである。それに私は、例の事件以来、暗闇というものに、ひどく親近感を覚えはじめていた。まったくの話、この世のすべての人間が、一瞬にして眼球を失うか、光の存在を忘れてしまいかしてくれたら、どんなにか素晴らしいことだろう。たちまち、あらゆる「形」に、和音が成立する。三角パンも、丸パンも、要するにパンはパンなのだということを、万人が納得する。……そういうえば、さっきの小娘だって、目をつぶったまま、ぼくの声だけを聞いていればよかったのだ。そうすれば、ぼくたちは一緒に遊園地に出掛け、並んでアイスクリームを食べあうような仲にだってなれていたかもしれないのに……なまじ光があつたばかりに、彼女は三角パンを、パンではなくて三角だと思ひ違えてしまった。光というやつは、自身透明であつても、照らしだす対象物を、ことごとく不透明に変えてしまうものらしいのだ。

しかし、現に光がある以上、闇はせいぜい期限つきの執行猶予ちんぎんちゆうよにしかすぎない。窓を開けると、雨まじりの風が、黒い蒸気のように吹込んできた。思わず、咳込み、サングラスを外して、涙をぬぐうと、通りをへだてた商店街の、電線や、電柱の頭や、並んだ軒の縁などが、往

き交う車のライトを受けて、拭き残した黒板のチョークの跡のように淡く光っていた。

廊下を近づくと足音がした。習慣になった動作で、眼鏡をかけなおす。ふとん屋が、管理人を通じてたのんでおいた、寝具一式を、届けに来たのだった。代金をドアの下から押しやって、ふとんは廊下に置いたままで、引取ってもらった。

これでなんとか、スタートの用意はととのつたようである。上衣をぬいで、洋服籠箆を開けると、扉の裏に、鏡がはめこんであった。もう一度、眼鏡をはずし、マスクをとり、鏡をのぞきこみながら、顔の繻帯（きんぎょ）を解きはじめる。三重にまかれた繻帯は、ぼつてり汗を吸込んで、朝まいたときの二倍の重さに感じられた。

やがて、解き終えたところから、わがもの顔に這い出してくる、蛭（ひる）の塊り……からみ合い、赤黒くふくれ上った、ケロイドの蛭……まったく、なんとという醜悪さだ！ ぼとんど……日課にして繰返していることなのだから、もうそろそろ馴れてくれてもいいように思うのだが……そのことさららしい驚きに、いっそう、むしろくしゃさせられるのだ。考えてみれば、なんの根拠もない、非合理的な感性である。たかだが、人間の容器、それもほんの一部分にすぎない顔の皮膚くらいに、なんだってそんな大騒ぎをしなければならぬのか。むろん、そうした

偏見や、固定観念は、べつに珍らしいものでもなんでもない。たとえば、まじないの信仰……人種的偏見……蛇に對するいわれの無い恐怖（あるいは、さつき手紙でも触れた、ゴキブリ恐怖症）。……だからといって、懂れに生きているニキビ面の青二才ならともかく、れっきとした研究所の一部門をあずけられ、船の錨（いかり）くらいの重さでは、しっかり世間に結びつけられているはずのぼくが、いままらそんな、心理的蕁麻疹に悩まされたりするようでは困るのだ。蛭の巢（ねど）に對する、直接の嫌悪以上には、べつだん理由がないと知りながら、それでも苦悩を断ち切れずにいる自分が、なんともやりきれなかったのである。

むろん、自分なりに、一応の努力はしてみたつもりである。いたずらに、避けて通るよりは、むしろ事態を直視して、それに馴れてしまうのが一番だろう。こちらが、なんとも思わなくなれば、相手もこだわるのをよすにちがいない。そう思っただけは、研究所でも、すすんで自分の顔を話題にするようにしたものだ。たとえば、自分を、テレビの漫画に出てくる、覆面の怪人になぞらえて、わざと大げさにかからかってみたりする。向うからはこちらの表情を見られずに、覗く一方という便利さを、わざと誇張して面白がってみせたりする。まず、他人に馴れてもらうことが、自分を馴らすなによりの早道にち

がない。

そして、それなりの効果はあったようだ。やがて、研究室のなかでは、さほどごちなさは感じずにすませられるようになっていた。覆面の怪人も、単なる虚勢ではなくなり、連中がテレビや漫画本に、飽きられもせずにも繰返し登場してくるのには、ちゃんとそれなりの根拠があるような気さえしはじめていたほどだ。たしかに、覆面には——下に蛭どもが巣くっているという現実さえなかつたら——ある居心地のよさがあつたこともまた事実である。肉体を、衣服で覆つたのが文明の進歩なら、将来、覆面が常識になることだつて、ないという保証はどこにもない。これまでだつて、重要な儀式や祭などの場合には、しばしば実際に使用されているのだ。うまく言いあらわすことは出来ないが、覆面は他人との関係を、素顔のとき以上に普遍的なものに高めてくれるのではあるまいか……

徐々にはあつたが、快癒かいゆに向つているのだと、信じかけている時もないではなかつた。だが私は、顔の恐ろしさを、まだ本当には知っていなかつたのである。そうした間にも、繻帯の下では、蛭の侵蝕がちやくちやくと進行しつづけていたのだ。液体空気による凍傷ようしょうなどは、火傷やけどほどには影響が深くなく、したがって回復も早いはずだという、医者いしやの保証にかかわらず……テラシ

ンの内服、コーチゾンの注射、放射線の照射と、手をかえ品をかえした、何重もの防禦陣をのりこえて……軍勢は、つぎからつぎへと、新手の兵をくりだし、ぼくの顔の奥深く占領区域をひろげて行つていたのである。

たとえば、ある日のこと……ちようどぼくが、同僚たちと、他の部署との連絡会議を終えて引返してきた昼休み……今年学校を出たばかりの、若い女の助手が、いわくありげな表情で、なにかの本のページをくりながら近づいて来た。

——ほら、先生、すぐく面白い絵。笑いを含んだ、細い指の下にあるのは、《偽りの顔》と題した、クレイの、ペン描きのデッサンだつた。その顔は、幾本かの平行線で水平に仕切られていて、見方によっては、繻帯でぐるぐる巻きにしたようにも見えなくはない。眼と、口のところだけが、わずかに狭い割目になっていて、無表情の表情が、残酷なまでに強調されていた。いきなりぼくは、言いようのない屈辱感におそわれた。むろん、彼女に、悪意があるうはずがない。しかも、彼女に、そんな氣を起こさせたのは、もとはと言えば、ぼくの意識的な誘導のせいだつたのだし……そうとも、落着くんた！ここで腹を立てたりしては、せつかくの苦心が水の泡じゃないか！……そう言いかせながらも、ついに我慢しとおすことが出来ず、やがてぼくには、その絵が、

まるで彼女の眼にうつった、ぼく自身の顔のようにさえ見えてくる……。見られるばかりで、見返すことの出来ない、偽りの顔……。そんなふうに、彼女から見られていたのだと思うのは、やはりなんとも、やりきれないことだった。

いきなり、その画集を、二つに引裂いてしまっていた。いっしょに、ぼくの心も引裂かれた。その裂け目から、ぼくの中身が、腐った卵のように流れ出した。脱け殻になったぼくは、破れたページを重ね合わせ、おずおずと彼女に返していた。だが、もう手後れだ。ふだんなら、聞こうとしてもなかなか聞こえない、恒温槽のサーモスタットが、トタン板を曲げるような大げさな音をたてていた。彼女は、スカートの下で、二つの膝を、まるで一本の棒にしてしまおうとでもいうように、強くこすり合わせつつづけていた。

そのときの狼狽の奥にかくされた意味を、ぼくはまだ本当には理解出来ずにいたようだ。身もたえするほど恥入りながら、しかし何に對してそれほど恥入っているのか、まだ正確にはつかめずにいた。いや、その気になれば、出来なくはなかったのかもしれないが、本能的に深みを覗くことを避けて、せいぜい「大人気ない行為」と

いった、ありきたりな慣用句の陰に身をさけていたのかもしれないぬ。どう考えてみても、人間という存在のなかで、顔くらいがそれほど大きな比重を占めたりするはずがない。人間の重さは、あくまでもその仕事の内容によって秤られるべきであり、それは大脳皮質には関係しなくても、顔などが口をはさむ余地のない世界であるはずだ。たかだか顔の喪失によって、秤の目盛に目立った変化があらわれるとすれば、それはもともと内容空疎であつたせいにはかななるまい。

しかし、ほどなく……たしか、あの画集の事件から、数日後……ぼくは、顔の比重が、そうした希望的観測をはるかに上まわるものであることを、いやというほど思い知らされることになったのである。その警告は、ひっそり足音もたてずに、内側からやってきた。外に向つての防備だけに気を奪われていたぼくは、不意をつかれ、あつけなく撃ち倒された。撃ち倒されながらも、すぐにはそれと理解できなかつたほど、鋭く突然の攻撃だったのである。

その夜、家に戻つたぼくは、珍らしくバッハを聴いてみようという気をおこしていた。べつに、バッハでなければならぬというわけではなかつたが、この振幅の短くなった、ささくれだつた気分には、ジャズでもないし、モーツァルトでもなく、やはりバッハがいちばん適して

いるように思われたのだ。ぼくは決して、音楽のよき鑑賞者ではないが、たぶんよき利用者ではあるだろう。仕事がりまぐはかどつてくれないようなとき、そのはかどらなさに応じて、必要な音楽を選びだすのだ。思考を一時中断させようと思うときには、刺戟的なジャズ、跳躍のバネを与えたいときには、思弁的なバルトーク、自在感を得たいときには、ベートーベンの弦楽四重奏曲、一点に集中させたいときには、螺旋運動的なモーツァルト、そしてバッハは、なによりも精神の均衡を必要とするときである。

だが、一瞬、ぼくはレコードを間違えたのではないかと疑った。でなければ、きつと、機械が故障してしまつたのだ。それほど、その曲は狂っていた。こんなバッハは、聞いたこともない。バッハを、魂の塗り糞だとすれば、こんなものは、毒にも薬にもならない、ただの粘土の塊りにすぎない。意味もなく、愚かしげで、通過する時がごとごとく、ほこりまみれの鉛細工のように思われた。

おまえが、二杯の紅茶をいれて、部屋に入ってきたのはちょうどその時だった。ぼくが黙りこんでいると、たぶん聴き惚れているでも思つたのだろう、そのまま足音をしのばせて、出て行ってしまった。すると、狂っているのは、やはり自分のほうだったらしい！ それにしても信じられない……顔の傷が、聴覚にまで影響するだ

なんて……しかし、いくら耳をすませてみても、融けたバッハがもとに戻らない以上、そう考えるしかなかったのだ。繻帯の割目にタバコを押し込んでやりながら、ほかに顔といつしよに失つたものがありはしないかと、おずおずとした物腰でたずねまわる。どうやら、顔に関するぼくの哲学は、根本的な修正をせまられているようだった。

それからいきなり、時間の床が抜けたみたいに、ぼくは三十年も昔の記憶のなかにいた。あれ以来、一度だつて思い出したこともない、その出来事が、色刷りの生々しきで、唐突によみがえってきたのである。ことのおこりは、姉の鬘だった。うまく言葉では言いあらわせないが、ぼくはその鬘に、なんとも言えず卑猥で、不道德なものを感じ、あるときこつそり、火にくべて焼いてしまつたのだ。ところが、どういうわけだか、母に発見されてしまつた。母は妙に意気込んで、ぼくを詰問し、ぼくは正義を行つたつもりだったのに、いざ詰問されてみると、なんと答えたらいいのかわからず、ただもじもじと赤面するばかりだった。いや、無理をすれば、答えられないこともなかったかもしれない。だが、そんなことは、口にするだけでも穢れるようで、潔癖感が口をつぐませていたのだと思う。……そして、その鬘を、顔という言葉でおきかえれば、あの我慢のならないもどかしさは、

そのままそっくり、崩壊したバッハの空虚なひびきに重なり合うのだった。

レコードを止め、追立てられるようにして書齋を出ると、おまえはちょうど、飯台に並べたガラスのコップを拭いているところだった。つづいて起きたことは、自分にもよく後をたどれないほど、発作的な衝動だった。おまえの抵抗に出会ってみて、やっと自分の姿勢の意味が理解できたような始末だ。ぼくは、右手でおまえの肩をおさえ、左手をおまえのスカートの下に差込もうとしているのだった。おまえは、うめき声をあげると、いきなりばねのように膝をのばして跳上った。椅子が倒れ、コップが一つ落ちて砕けた。

倒れた椅子をはさんで、ぼくたちは、息もつかずに立ちすくんでいた。たしかに、ぼくのやり方は、乱暴すぎたかもしれない。しかし、ぼくの方にだって、多少の言い分はあったのだ。顔の傷にさえぎられて、見失いかけているものを、一挙にとり返すための、せいっぱいの試みだったのである。あの事故があつて以来、ぼくたちは、ずっと関係を絶つたままだった。理屈の上では、顔に付随的な意味しか認めないようなことを言いながら、けつきよくは顔との対決を避けて、逃げまわっていたのかもしれない。しかし、ここまで追いつめられては、正面切って反撃に出るしかなかった。ぼくは、顔の格子が

幻影にすぎないことを、その行為で立証してみるつもりだったらしいのだ。

だがその試みも失敗に終わった。指先にはまだ、蠟石の粉をまぶしたようなおまえの内股の感触が、小さな鬼火になって火照りつづけていた。喉には、棘だらけの叫びが、束になって突きささっていた。なにか言おうとするのだが……言いたいことは、いくらでもあるはずなのに……かえって、一言も、口にするのが出来ない。弁解？ ……なぐさめ？ ……それとも、非難？ 喋るとすれば、その何れかに整理しなければならぬわけだが、とてもそんな整理くらいでは間に合いませんようになった。弁解や、なぐさめを選ぶのなら、むしろ煙のように消えてしまいたい。攻撃を選んでいたら……そう、たぶんおまえの顔を掻きむしって、すくなくもぼくと同じか、あるいはそれ以上の化物にしてやっていたことだろう。急におまえが、泣きじゃくりはじめた。断水した蛇口から空気がもれるみたいな、人を狼狽させる泣きかただった。

とつぜん、ぼくの顔に、ぼっかりと深い洞穴が口をあけた。その洞穴は、ぼくが体ごと入り込んで、まだゆとりがありそうなほど深くえぐられていた。腐った虫歯から出る膿のような液体が、どこからともなくにじみ出て、びちゃびちゃ音をたてながら、したたっている。そ